

経営情報誌『Anchor』に 掲載されました

タレント special × interview 代表取締役
つまみ枝豆 下元 信宏

昔ながらの技術を受け継ぎ こだわりの鋳物を製造する

1958年から大阪府で鋳造業を手掛ける『芝本鋳造所』は、昔ながらの「砂型鋳造」で高品質な鋳物を手掛けている。同社の二代目である下元社長は異業種出身で、義父である会長から事業受け継いだ人物だ。今日はタレントのつまみ枝豆氏が社長のもとを訪ね、社長の歩みをお話する。

—早速ですが、下元社長の歩みからお聞かせください。ご出身はどちらですか。地元・大阪府出身です。私の両親は高知出身で、父はごく普通のサラリーマンをしていました。私は卒業後、父の仕事のつながりで大阪の鉄筋屋に入り3年ほど経験を蓄積。そして鉄骨工場の仕事に移り、15年ほど続けてきました。

—そうでしたか。では、今のお仕事と出会ったきっかけは何でしょうか。実は、当社は私の妻の父が手掛けていた会社でした。ちょうど私が新たな仕事場を探していたところ義父から「次のところが見つかるまでの間だけでも手



伝ってみないか」と声をかけられたのが最初でした。私は35歳の時に、業界について全くの未経験の状態でした。率直に、何を作っているのか、業界のことを全く知らないまま入って（笑）。今でも知らないことはたくさんありますし勉強させていただく毎日です。

—未経験で業界に入られたのですか。こちらではどのようなものを作っているのでしょうか。

当社は「砂型鋳造」という鋳造方法をメインに手掛けています。大変な作業があるわけではないのですが、当社は昔ながらのつくり方を大切にしています。「砂

型鋳造」は砂で型を作るのですが、何度か使っていると誤差が出てくるので、作った砂型は一度きりしか使えません。つまり、100個の部品を作る場合、砂の型も100個必要だということ。砂の購入費だけでなく、砂の処分費用も必要になってきます。

最初のころは「どうしてこの製品を作るためにこれほどの労力が必要なんだだろう」と不思議に思っていたことでも、仕事に関わる中でその必要性を知っていきました。どんなに無駄に見える工程も、それがないと完成しない——そういった細やかな部分がとても奥深く、楽しいと感じたんです。日々勉強して失敗もたくさんありましたし、火傷や爆発も経験しました。危険はありますから常に注意は必要な仕事ですが、完成した時のやりがいは大きいと思います。

—製造業の醍醐味ですね。お義父様から事業を継ごうと思われたきっかけを伺ってもいいですか。

妻はお姉さんと2人姉妹で、会長としてはこの会社は自分の代でたむつもりだったそうなんです。ですから設備や事務所にお金をかけることもなく細々と、会社を一代で終わることを覚悟して続けたのですが、私が入ることを決めてから会長ももう一度頑張ってみようかということ、それから12年が経ちました。妻たち姉妹は、会社を継ぐという意識をあまり持っていなかったようでして、結局私が会長と一緒に仕事をしたことで、引き込まれてしまった形になります（笑）。

—昨今どの業界でも後継者不足で悩んでいる印象がありますが、お義父様も言われたのではないですか。



「義父から受け継いだ事業を絶やさぬよう、これまでのお客様を大切にすると共に、新しいお客様にも私達の仕事を知ってほしい」と下元社長。「顧客の幅を広げ、お客様も働く従業員も笑顔になれる会社を築いていきたい」とのお言葉からも、周囲の方々への深い愛情が感じられましたよ！

—そうであれば嬉しいですね。この会社にはすごい技術が詰まっていたので、私の代でもできる範囲でやってみようかというところなんです。会長も半業を促すつもりだったものの、私が入ったことで「もしかしらら」という気持ちになったんだと思います。この会社に入ってみて需要があることもわかりましたし、コンサルタントにお仕事もいただけていたことで、皆様に可愛がっていただけてすごく嬉しく思いました。お客様にも代替わりしたことをすごく喜んでいただいて、安心できたあの声もたくさん聞かせていただいています。

—それはよかったですね！では、代替わりを果たされ、社長が大切にしていることは何でしょうか。

どんな時も「嘘はつかない」ということです。人対人ですから、時には相手になかなか思いが伝わらないこともあります。しかし、今ついでてきている人はそんな私についてきてくれているのだと思っています。一つ嘘をついてしまえば、嘘を置かなければならなくなってしまう。そうすれば相手からの信頼を一瞬でなくすことになってしまいますから、仕事でも、家庭でも上手にいくコツは嘘をつかないことと思っています。

もう一つは「昔のやり方を引き継ぎたい」ということ。難しい部分ではありますが、大切な伝統として、そこを継承していく責任もあると感じています。そこを大切にしながら、お客様の声を聞いてあげていくと、ちょっとしたこだわりの部品を作ることができたりするんです。意外とそこに需要があるんです（笑）。手作業が多く、手間ひまかけた分多少高値になりますが、お客様のご要望に則り



かにお応えできることは当社の強みでもあると思っています。今はネットの時代ですから、全国を相手に依頼をいただくこともできますから、そういった良い部分はどんどんアップグレードしていこうと思っています。

—最後になりますが、今後の展望をお聞かせください。今はコロナの影響もありますが、従業員たちにもっと還元してあげたいと思っています。従業員たち皆がここで働いていてよかったと思える会社になりたいと思っています。私には息子がいますが、特に継いでほしいとは考えていません。息子にも、誇りとやりがいを持って打ち込める、そんな仕事に巡り合ってほしいと思います。

(2021年11月取材)

技術を絶やすこと無く、より広く伝える

▼長年現場仕事をこなしてきた下元社長は、「芝本鋳造所」の当時社長であった義父に誘われたことをきっかけに同社へ入った。何もかも初めての業界で12年、失敗もしながら日々成長を重ねてきた。

▼「会長は当初から何も聞かずに、私の好きにやらせてくれています」と社長。「当時は自由であるがゆえに不安もありましたが、好きなようにやらせてもらったおかげで今があるのでしょね」と話し、「失敗からも学んでほしい」との会長の思い、懐の広さに感謝していると社長。

▼今後はより多くの人々に同社の技術力を知ってほしい、との思いを持ちインターネットでの集客なども考えているのだそう。受け継いだ技術を守りながらも、時代の潮流も柔軟に受け入れて成長を続けるその姿勢で社長は同社をより大きく成長させていくに違いない。

有限会社 芝本鋳造所

大阪府富田林市伏山 1-16-5
URL: <https://shibacyu.jp>